

～記憶のなかの行事～

旧暦二月には、悪疫がムラ（集落）に入ってくるのを防ぐため、各ムラで「シマクサラシ」という行事が行われていました。

この日は、牛や豚の肉を炊いて食べるので、「シシクエーヨー（肉食えよ）」とも呼ばれていたようです。

棚原では、「シマクサラサー」と呼ばれ、旧暦二月一日に、カンジャーモーという場所で牛を潰し、その骨（ヒラゲーという大きな骨）をムラの西端（イリムテイ）と東端（アガリムテイ）の入口に吊るしたといえます。その際、普段とは逆に編んだ左縄ヒダナという縄に、骨を吊り下げるのだそうです。また、潰すまえの牛と、青年たちが力試しをしたという話もうかがいました。犠牲となる牛は、ムラで購入し、その肉は大きな鍋に煮てムラの人々にふるまわれました。

他ムラでは、二月のほかに、二月・八月の年二回行うところや、年に一回、四月や八月に、日を選んで実

施したところもあったようです。多いところでは、年に三回行われたそうで、肉を食する機会の少なかった昔は、ムラの人々が心待ちにする行事だったのではないのでしょうか。

「シマクサラシ」の行事は、掛保久や小橋川では明治から大正期には、すでに行われなくなっており、幸地や棚原でも沖縄戦終戦まで行われていましたが、戦後はどこのムラでも行われていません。そのため、期日がすでに忘れられたり、行事自体のお話をうかがうことも少なくなっています。

ムラへの悪疫の侵入を防ぎ、ムラ人の健康を願ったこの行事も、記憶のなかの行事となってしまいました。それらをひろいだし、記録していくことが私たちの役割ですが、今や時間との勝負となっています。当時の人々の精神世界をいとおしく敬いつつ、それらの行事を記録することで、先人たちから学び、今後のまちづくりの糧としていきたいものです。